馬居教授　静岡県立大学　集中講義　学生の作品への感想　（敬愛大生）

１１～２０

１１

私は、8Ｇの作品についての感想を述べたいと思う。「ジェンダーと（女らしさ・男らしさ）の偏見を乗り越えられてえるためには」という内容だ。授業でも取り上げられたこともあり、身近な問題だと感じた。まず、内容がとてもわかりやすく、見やすい。表やイラストを活用し、配色も良かった。

内容については、目に見えない「差」、目に見える「違い」をいかに解釈するか、偏見や固定観念が植え付けられていない子どものうちから考えさせ、身に着けさせることが、今後の社会発展につながるのではないだろうかとあった。こうあるべき形が昔と今では変わっている。子どものうちから自然と身につけられたら一番理想的だと思う。どうして女性車両はあるのだろうか？という視点が面白いと思った。

これについて私は、男女差別をなくすと言いながらレディースデーなど、自身にとって優遇されたと感じる差別は受け入れていると思った。自身が不利になることについては平等を主張しているのだと思った。　やはり色々な部分で人と比べてしまうが、違いを受け入れていくことが必要なんだと思う。

12

私は 8Gの、「ジェンダーと「女らしさ・男らしさ」の偏見を乗り越えるためには」を閲覧した。なぜこの作品を選んだのかというと、ゼミの授業で SDG s のジェンダーについて学んでいたからだ。

この作品を見て、自分の小中高の学校生活での教育内容を振り返ってみた。そうすると、その時は普通だと思っていたが、今考えると男女差別ではないのかと思うような格差があった。

例を挙げると、教員が女子に甘い、男子に厳しい、重いものは男が持つ、などという考えを持っている教員がいた。この作品を通して、改めてジェンダーの格差（男女格差）の教育がどこまで浸透しているかが分かった。私は、男女差別を無くすと同時に男女お互い理解し合い、尊重し合って生きることが大切だと思った。

１３

どのグループも現状から課題を見つけ出し、解決策や自分たちにできることを色々な資料を参考にしながら考えることができていると感じました。

その中で私が特に印象に残ったのは５Ｇの『防災教育』です。いくつかの班で静岡県での問題や静岡県の子供達に向けた授業を考えていましたが、この班は班員の静岡県、愛知県、岡山県を比べ、実体験とデータ、資料を比べて考察しているところがわかりやすくて良いと思いました。総合の時間は生徒が主体となり考えて学習していくため、実体験などを利用した

授業作りは興味が持ちやすくなるのではないかと考えました。
今回対象は高校生になっていましたが、私は小学校や中学校でも内容を少し変える、あるいは中学校に上がったときに内容を進化させるなどしてつながりを持たせ、授業をすることができるのではないかと考えました。
例えば、小学校では自分たちの住む地域を近くに住む子供たちでグループを作って歩き、オリジナルハザードマップを作り駅や市役所に貼ってもらったり、中学校では千葉県全体について調べポスターやチラシを作る活動もできたりするのではないかと考えました。

１４
8 つのグループ作品を読み、どのグループにおいても自分達で決めた題材について、各自の視点で問題を見つけ、その物を解決または理解するために情報を探し、班内で議論を行い、またそこから新しい問題を見つけていくという総合的な活動の時間のねらいとして示されているものがしっかりできていると思いました。
今回この 8 グループの中で私がとても興味を惹かれたものが 3 グループの「食からみる SDGs」です。このグループは食品ロスや食育、食料自給率などこれまでにも問題になっていた部分を自分達で考え、それを児童に授業する際にそのような順で行えば良いかなど考えながら行っていました。また授業構成を考える中で、一般論として共有されているものの認識を変え、しっかりと課題に対して考え、学んでいける環境を作るようにしていたことなど、これら私たちが学び実践していかないといけないことだと感じました。
この資料の中で、「日本での SDGs の課題と教育の役割」について書かれており、ただ生徒に考えさせるのではなく、自分達授業を行うものが正しい役割や内容、養わなければいけない能力を理解していることによってさらに深い学びにつながっていくと思いました。

１５
5Gの防災教育について思ったことを書きます。
小学校のころは防災訓練や、防災に関しての授業をたくさんしていて、防災が起きた時の対処法を割と覚えていました。今の高校生や大学生は割と防災に関しての意識が低いと思います。最近は異常気象だったり、大きな地震が起きるといわれています。起きた時にはもう遅いので、今のうちから対策しといたほうがいいと思います。防災に関しては忘れてはいけないし、後世にもしっかりと伝えなければいけないのです。

１６
現実社会で求められる「課題発見・解決能力」「論理的思考力」「コミュニケーション能力」などが、学校においても強く求められているのは自分が学生時代も重視されているのは実感できました。グループで課題を見つけて話し合い解決し発表する授業も多かった。これは社会に出ても役に立つのだと感じた。

また総合や学活の学習の時間に大人や地域の人と関わる授業があった。小学校の時は昔の遊びや地域の料理を地域の人に教わったりして学んでいた。中学校では、年に 1 回有名な方の演説を聞き班のメンバーと＋保護者や地域の大人の方が混ざって話し合いするイベントなどがあった。そこでは大人や地域の人と話し合いなどをすることで知らなかったことが知れたり話し合いを引っ張ってくれたり学べることが多かった。自分自身の成長につながると感じた。
これからの教育も今以上にひとりではなくみんなで何かに挑戦し話し合って解決していく体制や地域の方や大人の方と関わる機会を増やしていくべきだと感じました。
話し合いにおいてまずテーマを設定するのが大切で自分だけではなくメンバー個々がこの課題にどう向き合っているかや今どうなっているのかを話し合っているのがいいと思いました。
また話し合いをした上での改善点や考えたことなどを自分たちでまとめてひとつの意見に持っていっているのもいいと思いました。話し合いをしての反省もきちんとしているし次に向けて動いているのもいいと感じました。それぞれのまとめをみる限りみんなそれぞれいろんなところに気づいていて面白いなと感じました。私自身も話し合いをする時に今以上に振り返りを重視しようと感じました。

１７
貧困については意外にも低所得なだけでは貧困とは言えず、また何をもって貧困とするのか今の所は分からないと言う事が分かった。人それぞれ貧困とする定義が違うという事。一つの問題をとってみても様々な背景があるという事を改めて認識できた。
また別のトピック SDGs というテーマの資料を見ても貧困について述べられていた。公正な価格で継続的な取引をする事で生産者や労働者を支援する事の出来るフェアトレードがある。ただ物価は必然的に高くなるが理解が得られれば発展途上国の貧困の問題解決に大きく貢献できると言う事がよく分かった。また、一見すると別々のトピックを見ているようでこの様に、繋がってくる事柄があるという事を改めて理解した。

１８
「総合的な学習・探求の時間」の「学校と教師の可能性を求めて」の「4　2021 年度集中受講者の作品より」の「3　POWER　POINTO の PDF 版」の「4 G」を見て考えたことを記述する。
まず、「4 G」は防災教育を研究テーマにグループ独自の見解を活かした構想を練っていたことに感心した。
このグループの下調べを詳細に行い、データに基づき、客観的に自分たちが学んできたこととこれからの社会では何が必要なのかを比較し、現状はどうなのか地域ごとの違いを調べたり、実際に被災したらどうするのか、防災とは何なのかを生徒に教える前に身近に置きか

えたり初心に帰って考え、高校生が知るべきことを具体的に取り入れていてとても感銘を受けた。私は自分の考えを重視しがちで主張を押し付けるような授業構想や論述をすることが多いので、見習うべきだと感じた。
書籍やインターネットを活用した調べ学習を行うだけではなく、ZOOM などを用いて他の都道府県 の学校と情報共有するなどの新しい視点や取り組みで自分の地域だけではなく日本へと広く目を向けることでさらに生徒たちの幅広い視点の獲得へとつながらせ、より将来必要になる力の育成に努められると思った。
また、調べ学習やグループ談論など生徒主体の教育で、生徒の将来に活かすことができるだけではなく、作成したパンフレットを地域に配布するなど、学校から地域へと発信し、地域全体の防災への意識を高めることができ、現状の問題点の打開（災害意識が不十分など）が可能な内容になっていることが興味深いと思った。またこれにより、「変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる」を達成しやすくするためのサポートをしていてよく考えて構成されていると思った。
私が「防災教育」というテーマで「総合的な学習・探求の時間」を構成するのならば、このグループの内容に地域の独自のハザードマップをつくることを付け加えたいと思う。具体的には高校の最寄駅から高校までの道を実際に歩きながら調べ、地震が起きたらどこが危ないのか、また避難をする際に気を付けるべきことは何かを高校生の視点から再確認し、グループ独自のハザードマップにまとめ、駅や公民館、道路に掲示することでさらに生徒自身に加え、地域の防災意識を高めることができると思う。
19
私は８つあるグループの作品を見て、総合的な学習の時間は、扱う教材の選定が難しい反面、得られる学習効果は非常に幅広く、そして非常に深いものになる可能性を秘めていることが分かった。どのグループでも、教材に対する課題意識が、学習者ごとに分かれており、それぞれの観点から、テーマに沿ってグループと協力して課題を解決しているため、社会で生きるための『力』を身に着けることができたのではないかと考える。
　８つのグループのすべての作品を見ると、まず驚いたことが、資料の豊富さである。また、それらの資料に対する考えを、学習者のそれぞれの視点から考えをまとめている点である。これは、実際に授業を行う上で、非常に重要な手法であると考えた。私たちの大学の授業でも、似たような授業内容で、グループワークが多く取り入れられてきてはいたが、どれも中途半端な資料と、中途半端な意見ばかりでまとめられ、ひどい場合には、グループの一人に任せっきりになってしまうこともあった。
　私の経験から、実際に授業を行う際に、注意しておくべき点は、かならず学習者はひとつの意見や観点を持つことや、資料は各自で集めることなどが挙げられる。グループで学習する際は、こうした問題が発生する可能性は十分にあるため、気をつけたい。
　また、８つのグループは、どれも地域につなげる学習のまとめになっていることがわかる。

「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（中学校編）」にも記載がされているように、地域に広がる学習の効果は、社会に目を向ける一つのキャリア教育も兼ねており、グループそれぞれの課題意識をもとに、それに沿って地域の課題にも目を向けることで、自らの住んでいる地域に対する思いもはぐくまれることが分かった。自ら環境に働きかけてよくしようと思う気持ちが生まれるため、地域につなげる教育の重要性が分かった。

地域につなげることは、学習への意欲を高め、効果も高めるという大きなメリットがあるため、授業を行うとしたら、ぜひ実践したいとは思うものの、資料にも記載がされているように、教師が地域とつながっていくという課題があり、多忙な仕事の最中にそのような時間が取れるのかどうかが不安である。

２０

今回の課題は、静岡県立大学の学生の作成した「総合的学習の時間」のグループ作品（1G～8G）を見て、その感想を述べるというものだが、私がこの作品を見て、中でも印象に残ったものがある。それは、8 グループの『ジェンダーと「女らしさ・男らしさ」の偏見を乗り越えるためには』という作品である。

私がこの作品を選んだ理由が、私の身近な人で性的小数者と言われる立場の人がいるからである。身近にそのような人がいるからこそ私にとっては、ジェンダー教育はとても重要であり、もちろん小学生から大人までさまざまな年齢、性別の人に受けてもらいたい、知ってもらいたい内容である。現在では昔と比べさまざまな性別が後天的に身につくということへの理解が少しづつではあるが広まっているのも事実だが、未だ性的差別が実在しているのもまた事実である。例えばアメリカではトートバッグを男性が持つと girly な印象を受け与えるなどがその例に挙げられるだろう。

日本では考えられないような性的偏見も世界には存在している。同じように他の国では考えられないような性的差別がこの国日本にもまだまだあると思う。そういったことに対する意識を変えるためのジェンダー教育にはこのグループの作品は良い教材になると私は考える。